



# 丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

第14回

## 「丹波ヨブ」野林格蔵

今回は、「丹波ヨブ」こと野林格蔵（一八五三～一八九二）を見ていきます。

辻原光治との直接の交流はなかったかもしれませんが、前回、芦田謙造や胡麻のキリスト教徒を取り上げたからには野林格蔵に触れないわけにいきません。

主な資料は、松井文弥『丹波ヨブ』（二〇二〇年）です。松井は亀岡出身の牧師で、留岡幸助の後任として丹波教会に明治二四～三一年に在任し、野林と接しました。同書は、大正二年発行の原著を現代語訳したものです。

## ハンセン病を発症

野林格蔵は嘉永六年（一八五三）、胡麻村（南丹市日吉町）で父亀蔵、母すみの間に生まれました。野林家は田七反九畝・畑二反一畝を有し

（明治五年調べ）、綿打業も営む比較的豊かな農家でした。

明治十二年ころから格蔵の体にハンセン病の徴候が現れます。ハンセン病は、

いまでこそ治療薬もでき完治しますが、つい近年まで「業病」「天刑病」と恐れられ患者たちは理不尽な差別と迫害を受けてきました。

格蔵と家族は「非常に心を痛め、医者よ薬よと財産を傾け、治療のために八方手を尽くした。その上に熱心に神仏に祈願し、讃岐の金毘羅神社へはるばる二度も参詣した。家の門前には毎夜のように常夜灯をともし、ひたすら病気の全快を祈願」しました（松井）。

しかし、その効験は全くありません。頼みの妻も、四歳の息子萬蔵を残して実家へ帰ってしまいました。

## 信仰と迫害

絶望に陥った格蔵を救ったのは、キリスト教でした。

同村の芦田謙造医師の熱心な勧誘を受けて明治十七年六月の丹波教会設立に参加、ゴードン宣教師から洗礼を受けて初代信徒三十人の一人となりました。

胡麻でキリスト教が優勢になってくると、迫害も起こりました。前回述べたように十七年九月には胡麻会堂が放火されましたが、翌年八月十四日には格蔵宅も放火されます。

しかし、信徒たちの団結はかえって強固になり、格蔵の信仰生活も病状が悪化するにつれて逆に充実していきました。

二一年ごろには病毒は目を冒しました。同志社病院ペレー院長から治療の見込

みがないことを告げられます。家族への感染を防ぐよ

う忠告され、息子萬蔵を天田郡の傘屋へ奉公に出して引き離しました。

翌二二年には父亀蔵が死去。この頃には格蔵の視力は全く失われました。

## 山中で一人暮らし

病状が全身に及び体表にも表れてくると村人の嫌悪も増し、村の中で暮らすのが困難になりました。

二三年秋、村から離れた山中に小さな藁小屋を設けて移り住みます。小屋から張った一本の綱を手探りして谷底へ上り下りし、水を汲み自炊しました。三畳ほどの筵（むしろ）に伏していると、時

を告げさせるために飼っている鶏が手足をつつき、鼠が顔を咬みに来ました。胡麻の信徒たちは協力し

合って格蔵を支えました。

熱心な買い物や洗濯の世話をしてくれる老婆もいました。訪問者が「お寂しいでしょう」と聞くと、格蔵は「いえ、神様がそばにいらっ

しゃいますから」と大真面目に答えるのでした。

発病以来の出費がかさみ、野林家の財産はわずかな土地だけとなっていましたが、

政府の救助米を申請するには一切の土地を手放す必要がありました。格蔵は固辞しましたが、芦田謙造があ

えてこの土地を買い取り、毎日米五合の支援を受けることができました。

しかし、迫害はなお続きました。二四年三月には何者かが毒物入りの食事を差し入れ、七月には米びつの中に毒薬が振りかけられました。盲目ゆえ気づかず

食し、中毒を起こします。

芦田医師が駆け付けましたが、特に二度目は重症で、格蔵の衰弱を早めました。

この間、二四年四月には母すみが亡くなりました。

格蔵にとって「最善の愛護者、慰撫者」(松井)だった母は「格蔵や、どんな難儀があっても決して信仰を落とすなよ」と遺言しました。格蔵は後にこの『信仰を落とすな』の言葉を自らの形見として松井牧師に贈りました。

## 最期の日々

二四年九月二四日、村上太五平伝道師が小屋を見舞いきました。格蔵はかすれた声でお願いがあるとして、

「きのうまでは前の留岡幸助牧師のために祈っていましたが、もう苦しくてできません。代わって祈ってください」と言いました。村

上が「ゴードン宣教師から七円の寄付があった」と伝えると、そのうち一円を葬式費用に充て、残りは貯金するよう依頼しました。

死の前日には西田新蔵が訪れました。西田は胡麻の中心的な教徒で、常に格蔵の世話を惜しみませんでした。格蔵は自分の遺骸があまりにも不潔なので葬式を

してもらえないのではないかと案じていましたが、西田が「立派な式をする準備ができています」と告げると「もう思い残すことはない」と喜色を浮かべました。

九月二八日、訪れた者が静かに横たわっている格蔵の遺骸を見つけました。四十年の生涯でした。死後には各方面からの寄付を貯めていた二三元が残されていました。



野林格蔵のみちしるべ

## 後日譚

胡麻から殿田方面へ車を走らせていると「はぎの里」の手前左側の草むらの中に不思議な石碑があるのに気づきます。近づいて見ると、

十字架がはめ込まれた台座に「丹波ヨブ 野林格蔵記念 みちしるべ」と刻まれ、その上の自然石に「右とのだみち、左たわらみち」とあるのが読みとれます（左写真）。

これは、格蔵が世の中のために役立てたいとして建てた道標を、丹波新生教会が一九七八年に台座と共に再建したものです。

格蔵が「丹波ヨブ」と呼ばれるのは、旧約聖書「ヨブ記」の、迫害と病魔に耐えて

生きぬいたヨブの物語になちなむもので、信徒の誰からともなく言い出されました。一子萬蔵は、奉公先を飛び出し、刺青（いれずみ）を入れて無頼漢となり、「丹波」という通り名で恐れられていました。

しかし、当時住んでいた堺市でたまたまキリスト教の説教会に出会い、父に連れられて教会へ通った幼時を思い出して一挙に回心しました。後には堺の教会執事に選ばれるまでになり、大

正十年に開かれた格蔵没後三十周年記念式には丹波を訪れました。

格蔵の生涯は、船越昌の小説『鳥ヶ岳 丹波ヨブの生涯』（主婦の友社）にも活写されています。（山下幾雄）